



しびき



CONTENTS

- 8 2024年(1月～12月)出荷実績
- 7 企画・統計委員会 異業種企業訪問レポート
- 6 物流問題に関する講演会(流通経済大学 矢野裕児 教授)
- 6 南極から見た地球の過去・現在・未来
- 6 本吉洋一様講演会
- 5 ICDM役員会報告
- 4 技術委員会 ドイツ視察レポート
- 1 令和7年 賀詞交歓会



ドラム缶工業会 近松幸士郎 理事長

令和7年 賀詞交歓会

理事長挨拶

ドラム缶工業会の新年賀詞交歓会が1月10日(金)午後5時30分から鉄鋼会館(東京都中央区)で開催されました。会員企業をはじめ来賓および関係団体などから140名が参加しました。冒頭、挨拶に立った近松幸士郎理事長【日鉄ドラム(株)代表取締役社長】は本年の課題や活動について次のように述べました。

「新年あけましておめでとうございます。本日はご多忙の中、多くの皆様にご参集賜り誠にありがとうございます。新しい年を皆様とともに迎えられることを大変嬉しくまた光栄に存じます。昨年5月に藤井前理事長より理事長の職を引き継いで以来、責任の重さとともにこの業界の果たす役割の大きさを改めて実感しているところであります。皆様のドラム缶工業会へのご支援に対し、深く感謝を申し上げます。昨年を振り返りますと、日本国内では1月1日に発生した能登半島地震や夏の豪雨災害により多くの地域が甚大な被害を受けました。被災された皆様に改めて心よりお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復興をお祈り申し上げます。

さて、日本経済に目を向けますと、昨年はインバウンド需要の復活や賃上げの実現などを背景に力強さにはかけるものの緩やかな成長が見られた年でした。民間消費の回復や企業の設備投資の増加が国内景気を支え、昨年7～9月の実質GDP成長率は対前期比0.2%増と2期連続の増加となりました。本年も内需を中心とした底堅い成長が続くと期待されております。一方で世界経済に目を転じますと、全体では底堅い成長が見られましたが、中国経済は不動産市況の低迷などによる内需不振により成長は減速傾向であります。また、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエル・パレスチナ間の紛争など国際的な不安定要素が続いております。アメリカでは第二次トランプ政権の誕生となり、今後は政策動向、とりわけ通商政策が日本や世界経済にどのような影響を及ぼすか、注視が必要な状況です。

当工業会におきまして、昨年は200L鋼製ドラム缶の出荷が前年比で2%増加した一方で、鋼製ペール缶の出荷は4%減少する結果でした。国内景気の緩やかな回復がドラム缶需要に一定のプラスの影響をもたらしたものの中国の景気減速、石油化学分野での供給過剰が業界全体の成長に影を落とした1年でもありました。

こうした状況を踏まえて2025年に向けた工業会の取り組みについてお話をさせていただきます。本年は業界にとって課題を乗り越え、新たなステップを踏み出すための重要な1年となります。当工業会として、これから申し上げる四つのテーマに重点的に取り組んでまいります。

第1にカーボンニュートラルと循環型社会の実現であります。ご承知の通りドラム缶は実質的なりサイクル率が100%であり、効率的な資源循環エコシステムを有する、大変優れた産業容器です。カーボンニュートラル・循環社会の実現に向けて、その環境価値を広く社会に訴求してまいります。昨年リニューアルした工業会のホームページも活用し、環境に配慮した取り組みを積極的に発信することで、ドラム缶が持つ持続可能性の高さを広く認知していただけるようPR活動を展開してまいります。また、会員各社におかれましてもCO₂やエネルギーの削減に取り組んでおられます。昨年、工業会では「鋼製ドラム缶に関わる温室効果ガス排出量算定方法のJSDA標準」を制定し、会員におけるスコープ1、2、3の算出方法の統一的な基準を設けました。今後も業界として対外的にも分かりやすく納得感のある情報提供を心がけてまいります。

次に持続可能な物流体制の構築です。主要需要業界である化学業界では、経済産業省と国土交通省が主催する「フィジカルインターネット実現会議」の化学品ワーキンググループにおいて、パレットの標準化をはじめとした物流体制の効率化の検討を推進されています。当工業会としても引き続きこの化学品WGへのオブザーバー参加を通じ、化学品業界との意見交換を行ってまいります。また、昨年はドラム缶とペール缶空缶に関する2024年問題に対応すべく、受渡条件の標準化や荷待ち時間の削減などを盛り込んだお取引様宛の工業会文書を公表し、ご協力をお願いいたしました。本年も引き続き物流に関わる情報の収集と発信に努め、配送や荷役の効率化に向けた取り組みを進めてまいります。

第3に国際活動の展開であります。昨年4月に第11回AOSD国際会議を韓国仁川で開催し、19カ国から220名の参加を賜りました。会議は「Steel Drums: A Step Towards Global Sustainability」をテーマに、業界の技術動向や市場トレンドを共有し、大変有意義な場となりました。次回のAOSD国際会議は2027年秋に日本での開催が決定しています。本年から準備を本格化させ、日本の業界がドラム缶の製造技術や環境対策の議論をリードする場として成功に導いてまいります。また、欧米の団体と構成しますICDMでは昨年から2026年度までAOSDが議長

職を務めております。環境対策、各種法規制、物流、広報などグローバルな意見交換を積極的に進めてまいります。

最後に安全とコンプライアンスの徹底です。安全とコンプライアンスは全ての活動の基本です。安全委員会での災害事例の共有や会員各社での研修活動を通じ、業界全体の安全意識を向上させてまいります。さらにコンプライアンス研修会の充実を図り、業界の信頼性向上に努めます。これらの取り組みを通じて安心して働ける職場環境の整備を推進してまいります。

私たち工業会は多くの皆様のご支援のもと、持続可能な未来に向けた重要な役割を果たしていく決意を新たにしているところであります。本年が皆様とご家族、そしてドラム缶業界にとって実り多い1年となりますよう心から祈念申し上げ、私の年頭の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます」。

続いて関谷慶宣副理事長【JFEコンテナー(株)代表取締役社長】が「新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。常日頃から経済産業省様をはじめご来賓の方々にはご支援・ご指導いただきまして誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。先ほど近松理事長がお話しされました通り、我々が目指す持続可能な社会において鋼製ドラム缶・鋼製ペール缶は極めて優位性の高い容器であると確信しております。また、化学原料から様々な基礎素材・高機能素材に変化をさせ、我々の生活に欠かせない製品・商品になって人々の生活を支える、このサプライチェーンにおいて鋼製ドラム缶・鋼製ペール缶は重要な役割を果たしています。本年もこの環境価値、高度な利便性を皆様とともに世の中に浸透させていく活動をしていきたいと考えております。最後に安全について一言。残念なことに昨年は休業災害・不休災害ともに工業会全体として一昨年を上回っております。安全最優先、これを徹底して1人の怪我人も出さないという決意のもと、安全活動を進めていくことも併せて皆様をお願いしたいと思います。それではドラム缶工業会の益々の発展とお集まりの皆様の健康とご多幸を祈念して乾杯したいと思います」と挨拶し、乾杯の発声後に歓談に移りました。



ドラム缶工業会 関谷慶宣 副理事長

歓談の途中、経済産業省製造産業局金属課の鍋島学課長から来賓を代表してご祝辞をいただきました。「あけましておめでとうございます。本日はドラム缶工業会の賀詞交歓会にお招きいただきましてあり



経済産業省
製造産業局 鍋島学 金属課長

がとうございます。昨年は年始に能登半島地震があり、台風や豪雨など様々な自然災害に見舞われた一年となりました。そうしたときにドラム缶工業会におかれましては復旧復興活動にご協力いただき厚く御礼申し上げます。経済産業省では被災された地域の復旧復興支援に取り組んでおり、引き続きよろしく願いいたします。

経済関係では昨年は33年ぶりの賃上げ、史上最高水準の株価、GDP600兆円と明るいニュースがございます一方で、鉄鋼業界やドラム缶業界では必ずしも消費が力強くないという難しさもあると思います。経済産業省としては取引価格の転嫁の適正化などを通じて継続的な賃上げができる環境を確保していくことを目指しております。それを通じて少しでも消費が上向いてくれればと考えております。

また、年明けから金属課長として海外案件にも携わっておりますが、報道では鉄鋼企業の話が多かったと思います。大変残念ですけれども、アメリカ側に対しましてこの投資の重要性や安心して投資ができる環境を作っていくことの大切さを伝えてまいります。鉄鋼業界全体としては中国との関係もございます。昨年は中国からの鋼材の輸入が増えてきたということで大変な危機感があると思います。政府においても関係部署と連携しながらWTOルールに則った上で機動的かつ柔軟に対応してまいります。

本年は4月13日から約半年間、大阪・関西万博が開かれます。最初に話が持ち上がってから実に8年越しということで、コロナも乗り越え「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、どういう未来の形があるかということでのいろいろな展示もありますので、ぜひ現地にお運びをいただければと思っております。それから福島復興にも引き続き力を入れております。これは経済産業省にとって必ずやらなければいけないことと考えており、特に水産物の風評被害対策に取り組んでおります。ぜひ三陸・常磐ものをはじめ日本の海産物の消費拡大に貢献いただければと考えております。

最後に金属課としては今年1年皆様の事業環境が少し

でも見通しの良いものになるように取り組んでまいります。価格転嫁や特定就労といった様々な課題があると思いますが、ご相談いただければ皆様のために一生懸命頑張っていきたいと思っております。ドラム缶工業会の会員企業各社の益々のご発展と、ここにいらっしゃる皆様方のご健勝を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます」。

中締めでは長尾浩志副理事長【(株)長尾製缶所代表取締役社長】が「本日は新年のご多忙のところ、お集まりいただき誠にありがとうございます。昨年は1月1日の能登半島地震で幕を開けた大変厳しい年



ドラム缶工業会
長尾浩志 副理事長

でありました。また1週間後の1月17日は阪神・淡路大震災から30年目の節目を迎えます。我が国は世界の0.2%の国土面積に対して、マグニチュード6以上の地震は20%、津波は40%、自然災害の被害総額は全世界の12%におよびます。世界で唯一、四つの大陸プレートに接した2,000の活断層を持つ日本列島、これだけ災害危険度の高い国土で近代国家を作り上げた先進国は例をみません。本年は巳年。古来、脱皮をする蛇は復活と再生を連想させることから強い生命力につながるものだとおわれています。本年も自然災害のみならず国際情勢、経済環境等、大変厳しい年になると思われませんが、我々は蛇の強い生命力を見習って、業界全体で実力を示し、結束を固くして、頑張っていかなければならないと改めて決意を強くしております。今年1年が会員各社にとって良い年になることおよびご参集の皆様のご多幸、ご健勝を祈念して挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました」と挨拶しました。



ドラム缶工業会
常務理事 事務局長
廣川二郎



技術委員会 ドイツ視察レポート

2024年11月、ドラム缶工業会・技術委員会は、2018年以來となる海外視察を実施しました。今回の視察は、SDGsやカーボンニュートラルへの取り組み、ドラム缶製造技術や物流の現状、新規設備メーカーの動向を調査することを目的に、ドイツ国内の企業や団体を訪問しました。訪問先には、大手ドラム缶メーカー2社、部品メーカー1社、設備メーカー1社、そして欧州ドラム缶工業会 (SEFA) が含まれます。



1. 視察スケジュール

11月3日

羽田発、パリ経由でストラスブール到着

11月4日

Berger社 (縮輪メーカー) 視察

11月5日

Mauser-Werke社 (ドラム缶製造工場) 視察、SEFA 訪問

11月6日

Greif Packaging Germany, Loevenich社 (ドラム缶製造工場) 視察

11月7日

Beierling Engineering社 (設備メーカー) 視察

11月8日

ジンスハイム技術博物館見学

11月9日

フランクフルト発、帰国 (11月10日成田着)

2. 視察メンバー

氏名	会社
木原 幹人 (団長)	JFEコンテナ (株)
山下 達也 (副団長)	日鉄ドラム (株)
寒川 肇	斎藤ドラム罐工業 (株)
江原 真	JFEコンテナ (株)
藤村 克範	JFEコンテナ (株)
藤田 勇次	ダイカン (株)
井形 洋介	(株) 東京ドラム罐製作所
田代 豊	東邦シートフレーム (株)
武田 雅明	日鉄ドラム (株)
畑田 寛隆	日鉄ドラム (株)
松下 年伸	日鉄ドラム (株)
山口 裕輔	(株) 山本工作所
廣川 二郎	事務局
アマン菊池 久美子 (通訳)	(株) サイマル・インターナショナル

3. 大手ドラム缶メーカー

グローバル展開する大手2社の旗艦級工場を視察しました。

(1) Greif Packaging Germany, Loevenich社

製造現場における「ゲンバ (現場) コンセプト」を導入した運営が注目されました。これは、日本流の「始業ミーティング」「QC活動」「品質の情報共有」「安全宣言」を取り入れたものです。また、廃塗料を再利用した「エコグレー塗装」は、環境負荷低減への取り組みとして印象的でした。同社では、製造全体の95%にこの手法を適用しています。また、SEFAのガイドラインをもとに、顧客との間で外装疵の返品基準の明文化を推進していることも参考になりました。



Greifの幹部と

(2) Mauser-Werke GmbH社

毎年設備更新を行っている最新技術を取り入れた工場を見学しました。ドラム缶の外装塗装には水性塗料を採用し、化成処理を省くことで環境負荷を低減しています。さらに、鋼製ドラムだけでなくIBCコンテナの製造も手がけており、リサイクル材の活用や容器回収再



Mauserの幹部と

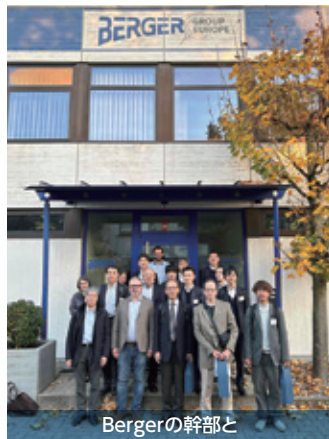
生事業を強化されていることが説明されました。物流面では、ドラム缶空缶の運送形態として、日本より大きいサイズのトレーラーがあり、顧客の要求に応じてパレット積みと棒積みの方を採用していました。

4. 欧州ドラム缶工業会 (SEFA)

欧州では、自動車業界の低迷や、エネルギーコストの増大や規制の厳格化を受けた大手化学メーカーの海外移転の影響もあり、2023年の欧州全体のドラム缶需要は2000年比で62%まで減少しています。また、環境規制として、移行期間を経て2026年から法制化されるPPWR (EU包装・容器包装廃棄物規制) が議論の中心となっており、リユース (再利用) 規制の厳格化が鋼製ドラムにも影響を及ぼす可能性があり、SEFAではロビー活動を精力的に展開中との説明がありました。

5. 部品メーカー: Berger社

Berger社は、ドイツを拠点にドラム缶用の締輪や天蓋、パッキンなどの部品を製造しており、世界10拠点を展開しています。同社ではUN規格に対応する製品を2,500種類以上製造しており、特に液体用に適した外レバーバンドの設計に強みがあります。工場では、生産工程の自



Bergerの幹部と

動化が進んでおり、溶接試験や品質チェックを含む安定した製造ラインが印象的でした。

6. 設備メーカー: Beierling Engineering社

ドラム缶製造設備に特化したBeierling Engineering社は、1972年設立のドイツ企業で、今回の視察がドラム缶工業会として初の訪問となりました。同社はオールサーボ化や非熟練作業でも扱いやすいインターフェイスを採用し、省エネや自動化、省力化に優れた装置の開発を強みとしています。また、顧客のカスタマイズニーズへの柔軟な対応も、同社の強みです。視察した刻印プレスやマルチタイプ天板口金装着機は、従来設備と比べ大幅に進化しており、同社の設備は工業会会員にとって有力な選択肢となり得るものでした。



Beierling Engineering (Bubbelke社長と設備)

7. 団長所感

今回の視察では、SDGsやカーボンニュートラルへの取り組み、ドラム缶製造技術や物流の現状を包括的に確認する貴重な機会となりました。効率化や技術革新の事例は日本でも大いに参考になる内容であり、これらが各社の操業や設備更新に役立てられていくことを期待します。また、技術委員会としては引き続き環境規制の動向に注視してまいります。

ICDM 役員会を京都で開催しました

米州、欧州、アジアの3地域にわたる鋼製ドラム缶製造業者の工業会で構成される国際鋼製ドラム製造業連合会 (ICDM) の2024年役員会が、12月6日に京都のウェスティン都ホテルで開催されました。ICDMにはアジア・オセアニア (AOSD) を代表してドラム缶工業会 (JSDA) が参加しており、2024年から2026年まで、AOSD会長がICDM会長を輪番制で務めています。

会議では、各地域の出荷統計が報告され、2024年の見通しについて議論されました。アジアと米国では回復傾向が見られる一方、欧州ではエネルギーコストの高騰に伴い、化学産業が域外移転する動きが影響し、出荷量が低迷していることが報告されました。

環境規制に関する議題では、EUの包装・容器包装廃棄物規制 (PPWR) の法制化に関する進捗状況について欧州代表より報告があり、今後の二次立法に向けて業界として積極的に関与していく方針が示されました。

また、GHGプロトコールに基づくドラム缶新缶のCO₂排出量算出に関する議論では、ドラム缶工業会が昨年制定した算出方法であるJSDA標準を紹介し、欧州および米国から参考モデルとして高く評価されました。

さらに、新たなテーマとして、ドラム缶の空缶輸送の実態やパレット利用の現状について各地域から報告があり、物流における課題について意見交換が行われました。このように、多岐にわたる業界課題に関する情報共有が行われ、大変有意義な会議となりました。

次回のICDM役員会は、2025年10月に米国西海岸で開催される予定です。



会議後、南禅寺での集合写真

「南極から見た地球の過去・現在・未来」

～地球史46億年のタイムカプセル～

ドラム缶工業会では毎年、各分野の専門家を講師としてお招きし、会員向けの講演会を開催しています。昨年10月24日には、地球環境をテーマに、国立極地研究所・名誉教授であり、11回にわたる南極観測に参加した経験を持つ元南極観測隊長の本吉洋一先生をお招きし、鉄鋼会館にて講演会を開催しました。講演は会場参加とリモート参加を合わせ、約100名が出席しました。

講演ではまず、昭和基地におけるドラム缶の役割、すなわち燃料輸送や再利用を通じて南極観測に貢献していることに言及されました。その後、日本の南極観測の歴史について詳しく解説され、100年以上前の1912年に白瀬中尉が挑んだ南極探検から、戦後復興期に国を挙げて取り組んだ南極観測事業が昭和基地設立へとつながった経緯が語られました。

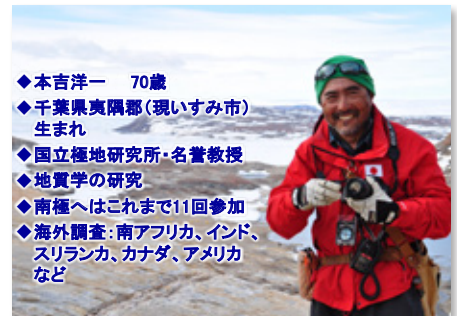
続いて、地質学の視点から南極大陸の特異な役割について説明がありました。南極は「地球史46億年のタイムカプセル」と呼ばれ、氷床に閉じ込められた古代の大気や岩石から、地球の気候変動や生命の進化を解き明かす貴重な手がかりが得られるといえます。また、南極で発見された隕石には月や火星由来の物質が含まれており、南極が地球を超えた宇宙の歴史を読み解く重要な窓口であることが強調されました。

さらに、近年の地球温暖化が南極に与える影響についても詳しく解説されました。研究によると、南極の氷が溶け出し、最悪の場合、海面が約60メートル上昇する可能性があるとの警告があり、こうした環境変化が人類に与える影響が説明されました。また、30万年以上にわたる地球の気温とCO₂濃度の周期変動を示し、現在の間氷期が終わりに近づいており、この後、地球が寒冷化する可能性があるとも指摘されました。地球の歴史を1年に例えるスケール感では、46億年前の地球誕生を「1月1日」とすると、人類の登場は「12月31日午後8時12分」に相当し、その存在が地球全体の時間軸から見て極めて短いことが示されました。

最後に、南極観測船「しらせ」がラミングと呼ばれる技術を使って定着氷を破碎しながら進む様子の動画や、昭和基地での観測隊員による調査活動や生活の様子が紹介されました。南極での生活の厳しさや隊員の創意工夫と、その中で行われる科学的探求の価値が強調され、参加者の関心を集めました。

さらに、会場では本吉先生が南極で採取した隕石や鉱物の実物を持参され、参加者が手に取って見る機会も設けられました。加えて、国立極地研究所で開催されている常設展示やオープンキャンパスについても紹介され、南極や北極についてさらに深く学ぶための情報が共有されました。

講演会の参加者からは、「南極が地球の過去や未来を解き明かす重要な役割を果たしていることを学んだ」「普段の生活では考えもしないスケール感や俯瞰的な視点から、人類の存在がいかに短いかを実感できた」といった感想が寄せられました。また、「南極での観測経験を持つ本吉先生から直接お話を伺えたことは、非常に貴重な機会だった」との声も多く、大変好評を博した講演会となりました。



- ◆本吉洋一 70歳
- ◆千葉県夷隅郡(現いすみ市)生まれ
- ◆国立極地研究所・名誉教授
- ◆地質学の研究
- ◆南極へはこれまで11回参加
- ◆海外調査:南アフリカ、インド、スリランカ、カナダ、アメリカなど

本吉先生の講演資料より



南極で使用されるドラム缶



ご講演中の本吉先生



南極観測船「しらせ」



実物の隕石の展示の前に記念写真:中央が本吉先生

国立極地研究所 南極・北極科学館のホームページは
こちらの二次元コードからご覧いただけます。▶▶▶



持続可能な物流構築に向けての物流改革



昨年12月12日、流通経済大学教授であり、日本物流学会会長やフィジカルインターネット実現会議の化学品WG座長を務める矢野裕児教授をお招きし、鉄鋼会館で講演会を開催しました（リモート参加者を含め約130名が参加）。物流問題はドラム缶工業会にとっても重要課題であり、今回の講演では、物流分野が抱える課題とその解決策について幅広く解説されました。本講演は、工業会および会員企業の今後の取り組みに大いに役立つ、有意義な機会となりました。

講演の冒頭では、物流問題が決して新しい課題ではないことが示されました。高度経済成長期やバブル期にも物流需要の増加に対して供給不足が発生していましたが、当時は需要の鎮静化によって問題が一時的に収束していました。しかし現在は、収入や労働環境の悪化で若手ドライバーの確保が難しく、ドライバーの高齢化という構造的な問題が顕著となっています。

次いで、「物流の2024年問題」の引き金となった、昨年4月に施行されたトラック運転手の労働時間規制強化について言及されました。この規制により、運賃の値上げや輸送日数の増加が避けられず、生鮮食品や建設資材の分野、特に地方部での供給不足が深刻化する可能性や、繁忙期の物流停滞が懸念されることが説明されました。

こうした状況を踏まえ、持続可能な物流改革の必要性が強調されました。その柱として、ソフト面およびパレットなどハード面の標準化を前提に、IoTなどの新技術を活用した物流DXによる業務効率化、ドライバー不足を解消するための待遇改善、そして地球環境に配慮した物流構造の構築が挙げられました。

また、物流体制の転換についても触れられました。サプライチェーン全体で情報を共有し、需給バランスを調整することで計画化・平準化を進めることが重要とされています。これにより、従来の「需要に応じた供給最適化」から「供給に需要を合わせる」仕組みへの移行が可能となり、無理のない物流体制の構築が期待されます。

最後に、新物流効率化法に基づく物流効率化の取り組みや、物流分野への下請法の適用拡大、国土交通省と公正取引委員会が連携して進める不公正な取引慣行の是正についての動向が解説されました。



矢野裕児教授

企画・統計委員会 異業種企業訪問レポート

株式会社ダイカン様（大阪市大正区）

ドラム缶工業会の企画・統計委員会で、大阪市のサイン（看板）関連事業を手掛ける（株）ダイカンを訪問しました。

日 時：令和6年10月17日（木） 午後1時～午後3時30分

見学場所：株式会社ダイカン

大阪オフィス（ショールーム）・本社工場

見学参加者：ドラム缶7社 11名



（株）ダイカンの製品（同社ホームページより）

（株）ダイカンは、現代表取締役社長・仁義修様の先代により創業された、60年の歴史を誇るLEDサインや看板製作の専門企業です。最新技術を駆使し、高品質な製品を通じて取引先企業のブランド価値向上に寄与することを目指されています。

訪問当日は、仁義社長より、同社の歴史や企業理念、新規製品開発への積極的な取り組み、海外高級ブランド市場への挑戦とその過程でのご苦労、さらにベトナム工場の現地化を重視した運営方針など、同社が歩んできた道のりと未来への展望について熱意のこもったお話を伺いました。

ショールームでは、普段私たちが目にする様々なサインに加え、疑似金属サインなどの独創的で高度な技術が結集された製品群をご紹介いただきました。続く本社工場見学では、サイン製作のデザイン設計から製造に至る工程を間近で見学し、独自の労働時間管理手法や各部門間のチームワーク重視の姿勢に触れることができました。また、従業員の皆様の明るく元気な挨拶が印象に残りました。

異業種ではありますが、多くの新しい視点と学びを得られた今回の訪問は、非常に有意義なものとなりました。



（株）ダイカン 仁義社長（前列左から2番目）との集合写真

2024年(1月~12月) 出荷実績

2024年の200L缶の出荷は、前年に比べ2.4%増、294千本増の12,577千本となりました。

用途別では、前年に比べ化学向け(2.2%増、212千本増)、石油向け(3.1%増、56千本増)、塗料向け(6.9%増、41千本増)が増加し、食料品向け(5.9%減、11千本減)、その他向け(2.4%減、3千本減)が減少しました。

ペール缶は前年比3.9%減の16,461千本、中小型缶は1.2%増の397千本となりました。

2024年缶種別・用途別出荷実績

缶種	2024年実績						
	本数 (千本)	前年比 (%)	用途別(本数(千本))				
			石油	化学	塗料	食料品	その他
200L缶	12,577	102.4	1,872 (103.1)	9,764 (102.2)	631 (106.9)	171 (94.1)	139 (97.6)
ペール缶	16,461	96.1	8,629 (90.9)	6,830 (102.5)	467 (100.4)	0	535 (106.7)
中小型缶	397	101.2	0	382	0	0	14
亜鉛鉄板缶	287	86.7	0	279	3	4	2
ステンレス缶	32	93.1	0	29	1	0	1
合計	29,754	—	10,501	17,284	1,102	175	692
前年比(%)	—	—	99.9	101.8	106.3	95.0	100.8
構成比(%)	—	—	17.9	74.6	4.8	1.3	1.4

(注) 1. 用途別200L缶、ペール缶の下段()は前年比。
2. 前年比ならびに、構成比は、トン数ベース。
3. 亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は、200Lドラムおよび中小型缶を含む。
4. 総本数は、29,754,235本。表上数値は四捨五入による差異がある。

(単位:千本)

缶種	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
200L缶	13,165	13,717	13,579	13,587	14,101	14,134	13,606	12,618	14,265	13,347	12,283	12,577
ペール缶	19,286	19,188	18,935	19,177	19,681	19,528	18,776	17,434	19,002	18,539	17,129	16,461
中小型缶	539	484	479	420	416	493	504	448	427	393	393	397
亜鉛鉄板缶	398	405	356	366	350	386	419	355	327	349	331	287
ステンレス缶	33	37	30	40	34	39	33	28	30	36	34	32
合計	33,421	33,831	33,379	33,590	34,583	34,580	33,337	30,882	34,052	32,663	30,170	29,754

・・・事務局だより・・・

ドイツ視察中、環境先進国を実感。ホテルのアメニティは最小限。液体ソープのみのところもあり、シャンプーが無く髪がゴワゴワに。部屋にはペットボトル水ではなくガラスの水差しがあり、共有のウォーターサーバーを利用。また、公共やレストランのトイレは有料(€1)。日本との違いに戸惑いつつも、各訪問先では温かいもてなしを受け充実した視察旅でした。

会員

〈正会員〉

- 斎藤ドラム罐工業(株)
- JFEコンテナ(株)
- (株) ジャパンペール
- 新邦工業(株)
- ダイカン(株)
- (株) 東京ドラム罐製作所
- 東邦シートフレーム(株)
- (株) 長尾製缶所
- 日鉄ドラム(株)
- (株) 前田製作所
- (株) 山本工作所

〈準会員〉

- 森島金属工業(株)

〈賛助会員〉

- エノモト工業(株)
- (株) 大和鉄工所
- 三喜プレス工業(株)
- (株) 城内製作所
- 東邦工板(株)
- (株) 水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025
東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
(鉄鋼会館6階)
TEL 03-3669-5141
FAX 03-3669-2969
e-mail: drum.pail@jsda.gr.jp

URL: <https://www.jsda.gr.jp/>

ひびきNo.90 (2025年2月7日発行)

発行人 ドラム缶工業会
常務理事 事務局長 廣川 二郎

無断での複製、転載はお断りいたします。詳細はお問い合わせください。
本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。